

伝統的生活技術に伴う生活意識およびその産業化のための人的要因
—和歌山県北部の棕櫚産業の盛衰から—
村上弥生（京都大）

目的 高度経済成長期以前の日本では、伝統的生活技術が特に農山村には多種多様に存続していた。また、より豊かな生活のためにそれらの技術を活用してその場所の地理的、自然的、経済的条件に応じたその土地特有の地方産業を発展させていた場合があった。それは基本的に再生産可能な資源循環のうえに乗ったものであった。このような状況の中での人々の生活意識はどのようなものであったのかを探るとともに、それらの生活技術を産業として展開させ得た条件は何であったかを追究することにした。

方法 和歌山県北部の有田川、野上川流域の山村等での聞き取り調査と共に、民俗学関係および大日本山林会報等農山村に関する文献の収集と分析。

結果 このような生活状況の中で人々は、仕事や生活の基本は植物の成長的循環であることを知っており、労働観、生活観はそれを反映したものになっていた。これは現代の、特に都市部住民の労働意識とはかなり違ったものになる。このことを今日社会状況の中で再認識することは重要な意味を持つと考えた。またこのような中で、その土地の資源および技術を地方産業として展開させるに当たって、資源や交通手段、労働力等の外的な条件が整っている状況があったということ以上に人々の意識という内的な条件が重要であったということが分かった。特に、一人または少数の先駆的な意識の持ち主の存在がその地域の状況を左右するほど大きな意味を持ったと考えられる。これらのことは今日の農山村の活性化や、さらには環境の問題を考える際にも役立つのではないかと考えた。